



## 旧マッケンジー邸現代美術展によせて

現代美術が美術館という建物を飛び出し、様々な場所、領域、制度に活動を展開することは、もう目新しいことではなくなった。とりわけ昨今の特徴は、歴史的建造物を現代美術展の会場として使用することで、その例は横浜 Bank ARTなど枚挙にいとまない。この背景には、平成8年の文化財保護法改正による歴史的建造物の文化財登録促進がある。この登録有形文化財は、従来の指定文化財よりも保全に対して規制が緩やかで、積極的な利用を主旨としている点に特徴があり、各地域は、観光、教育などとともアートにも白羽の矢を立てたのである。このことはアートの側にとっても渡りに船であり、純粋化しすぎた現代美術に、歴史や地域の豊富な文脈を回復する好機となった。こうして地域とアートが相互に働きあって、地域文化の再発見やそれを起点とした市民参加や地域連携などが花開くこととなる。

旧マッケンジー邸現代美術展も、基本的にはその流れに乗るものであろう。旧マッケンジー邸の建築的魅力や、マッケンジー夫妻の人柄やお茶（静岡特産）にまつわる物語、さらには駿河湾や富士山という絶好のロケーションなど、文化資産価値はきわめて高い。それに対してアートがいかに臨むかは、各作家、腕のみせどころだ。地域再認識の効果や関係機関の連携も漸進しているようだ。新市立美術館の開館をにらんでの文化政策もあるだろう。この展覧会が静岡ならではの個性化と質的向上をはたし、地域のみならず全国からの注目と集客を集める可能性は大であると期待を込めて言っておきたい。

と、さんざん煽るようなことを言っておきながら、本心は別のところにある。実は、参加している若い作家たちのメンタリティは、そうしたアジテーションとは正反対のところにあるのではないかと思うのだ。

量質ともに重厚な歴史的建造物とその内装や調度品は、それ自体のコンセプトと歴史の蓄積によって、もともと他者の入り込む隙を与えない。アートがそこに入っていくとき、えてして自己主張を抑えて調和をはかるか、逆に声高に自己を主張して破壊者としてふるまうかの、どちらかになりがちである。前者の場合、インテリアの一部として回収されてしまい、後者の場合は場違いな異物として浮いた存在で終わる。

それは人と人、あるいは人と社会の関わり方に似ている。どちらかが一方に取り込まれてしまうと進展はない。だが互いが異なり続け、互いに排除しようとするとき、その排他的な心性どうしが共鳴することがある（第三者が重要な役割を果たすことも多い）。安易に融和されず、異物を抱え込んだまま居心地の悪い状態が続くのだが、共振が互いのバリアーを干渉し、変化へむかう隙を生む。

一昔前までなら、こうした付き合いは、「殴りあって分かり合う」といったクサイ態度を取ることが多かったかもしれない。実際、先輩の作家たちは様々な人やものと殴りあって生き抜いてきたのだ。しかし昨今の若者のやり方は、もっとクールだ。自分とは何か知りたい。自己を認識するために他者は必要だ。でも他者と向き合うのはイヤだ。だから自分が何かわからない。だからと言って、人の言葉に乗せられて行動するのはもっとイヤだ。ただ、そっと他者の隣に寄り添い、心が響きあうのを静かに待つ。

幸いなことに（あるいは悲しむべきことに）、静岡市には、横浜や妻有や金沢のような巨大なテールはない。その「ゆるさ」は、むしろ地元若いや作家たちにとっては、ひとつの可能性を開いているように思える。それは他者との共存のありかたを、彼らなりの表現として見せる場を生んでいるのではないだろうか。

旧マッケンジー邸現代美術展には、地域おこしといった大言壮語がない（もちろん行政上の理念はあるだろうが）。それゆえ作家たちは「ゆるく」参加し、ごく自然体で制作しているように思える。建物に果敢に臨む作品は少なかったし、かと言って安易に融和をはかるものもなかった。参加作家どうしの殴りあいなどは、その痕跡もうかがえない。多くが自分を保持しつつ、礼儀正しく、ちょっと軒先を貸してもらっているといった風情であった。建物を再構築するような展示は最初から放棄されているし、もともと見る方もそれを期待していないと思う。建物といっしょに息づき、ゆっくり呼吸をかわせる。あるいは建物のかすかな鼓動に聞き耳を立てて、そっと自分の心音を重ねる。そんなささやかな気配が、建物、作品、観者の間に満ちていた。

時代の先端を切り開く現代美術展もいだろう。だが地域ごとに、その地域の身の丈にあった現代美術展もあっていいと思う。そうした裾野の広がりの中にこそ、真に社会に必要とされ、時代と地域を映し出す表現があるに違いない。

